

## 12. 死霊の帰宅と水買い

イギリスのフレイザー博士の著『プシケの仕事』（F. G. Frazer *Psyche's Task*）第五章に、野蛮人は葬送から帰ると、鬼魂が復戻るのを恐れて、たくさん謀を設けてそれを妨害する、と言う。ツングース人は雪や木で道を塞ぐ。ビルマのチン族は竹竿を路上に横に置く。ネパールのマングアル族は葬りの後一人がまず帰り、いばらの棘を集めて途中に積んで、障碍とし、上に大石を置き、その上に立って、片手に香炉を持って、葬送の者が一人残らず石の上から香煙の中をくぐり、鬼が香を嗅ぐと止まって、生きた人間の肩に乗って棘を越えて行くには至らない。『顔氏家訓』巻二に“偏傍の書〔まともでない書物〕に、死んで帰殺あり、子孫逃亡し、家に在るを肯んずる莫し。呪を画き符を書き、諸の厭勝を作す。喪出づるの日、門前に火を燃やし、戸外に灰を列き、祓いをして家鬼を送り、章断注連す。凡そ此の如き比は、人情に近からず。乃ち儒雅の罪人にして、弾議の当に加うべきところなり”と云う。いま紹興の回喪は、門外で穀物の殻を焚き、葬送の者は煙を跨いで過ぎ、始めて各々その家に帰る。その意図するところは同じで、つまり鬼魂の付着を防ぐのである。

周去非の『嶺外代答』巻六に、“欽人始めて死するや、孝子被髪して竹笠を頂き、瓶甕を携え、紙銭を持ち、水浜に往きて号慟し、銭を水に擲ちて汲みて帰り尸を浴う。これを買水と謂い、しからざれば隣里以て不孝と為す。今欽人食用に銭を以て水に易え以て包厨に充つ、之を水を沽うと謂う者は、凶名を避けるなり。邕州溪峒では則ち男女川に群浴し、号泣して帰る。”と云う。いま紹興では人が死んで納棺しようとするれば、孝子は死者の衣を着て、黄色い傘をさし、鼓樂して汀に行き、銅銭と鉄釘それぞれ一を投げ、水を汲んで帰りそれで尸を浴するの、やはり買水という、おそらく死者が自分で水を水神から買うのであろう。俗伝では満州が山海関を入ると、越人には“生きて降るも死しては降らず”という誓いがあるから、納棺の時には束髪にして髻を結び弁髪にはせず、また清朝の水は使わず、自分で銭を出して買うのだと云うが、『嶺外代答』<sup>i</sup>の記すところを見るに、この風習は宋代にすでにあつて、しかも越中という一隅に限らない。紹興の転煞<sup>ii</sup>の儀式もすこぶる鄭重で、煞はすなわち尸を洗った水を傾けた地から起こり、流星のような姿をしているが、もともと死者の魄である。ただ又別に煞神があつて、人首鶏身で、もと牝牡の二神がいたのだが、趙匡胤がまだ不遇のころ人の家に泊まって、たまたま死者の魄が帰ってくるのに会い、その一つを攫って食べたので、それ以降世間には雌神だけになったのだと云う。

以上は張辯帥〔張勳〕が復辟したその日、会館のボロ部屋で本を読んで憂さを晴らした時の隨筆の一条で、前後すでに十年、その時に書いたのは生かじりの文言だが、内容はまだ少し面白いので、ここにそれを引き写した。野蛮思想がどんなに根強く現代の生活の中に根を下ろしているかがわかる。われわれが儒教を以て国を立てていると自称している中華は実際にはまだ東北アジアに今まさに流通しているシャーマニズムを崇拜しているのだ。孔孟を暗誦する者もいるし、老荘を注釈する者もいるが、彼ら（孔・老たち）は中国の国民にとって実はそんな人はいなかったに等しいのである。海面の波浪は動いているが、海底の水は千年元の如しである。この底の状

況を調査して、中国民間信仰の思想が一体どういうものかを見ることは、むだな事ではないと思う。文化の程度は文明社会の野蛮人の多少と比例をなしているが、中国ではどういう比例なのだろうか。

※初出：1926年1月25日『語絲』第63期

---

i 『嶺外代答』十卷 宋周去非撰 広東など南方の風俗・土産等を記した書。知不足齋叢書本等がある。

ii 転煞 未詳。転は避けると云う意か。